
賢者と天才と凡人

模造堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者と天才と凡人

【Nコード】

N9408Y

【作者名】

模造堂

【あらすじ】

とある親子は同じように賢者になった。
とある親子は同じように互いを理解した
とある親子は同じように不確定な未来を持つことになる。

その中で天才は成長し、凡人はいつの間にか愉快的仲間になった。
その凡人の物語。

第一編 0 1 (前書き)

とある転生者の物語の別の物語でチートに近い、父親のほうは遙かに反則的にチート、雑文ですがお暇な方暇つぶしにどうぞ、

1
1
まだ小学校に上がったばかりで遺伝子の病気で十年も生きられないと知った。

正直、幼かっただけによく分からなかった、そんな時に実業家と名乗る子供でも知っている会社のオーナーが治療を申し出た。

両親は何も言わず承諾し天空大陸で半年間コールドスリープで遺伝子を直した、そんな病気だったそうで、地表の七姉妹都市に戻ってその実業家のお兄さんと出会った。
こんな会話だった。

「よく無事だったね」

「治療してくれてありがとうございます」

「礼儀が好いな」

「それでも武門の生まれですから」

「将来困ったとき、これを」

渡されたのは紙切れの電話番号と住所とクリスタルだった。

それを受け取り、お兄さんと別れ自宅に帰った。

その後興味本位でクリスタルを弄って噛んだ、それが発動とは知らずにその後三ヶ月間こん睡状態に陥って、病院から退院したのはさらに一カ月後、学校に戻る前に、知識の本流をどう扱うかが分からず、自己流で理解できる点を書き出した。

両親から見れば勉強している様子で、よく家族で勉強会を開いて楽しんだ。

その両親は三カ月後に交通事故で亡くなった。

遺産目当てに親戚が集まったが、執事と名乗る人が来て紹介状を見せ、覚えていた電話番号と住所を伝えた。

そしたら養子縁組が決まっており、お兄さんは成人には届かないが結婚年齢で縁組は出来るので承諾した、親戚達は醜い争いを繰り返していたが、遺産管理人が大物らしく、あっさり引き下がった。それから天空大陸で作られた、現在確認されている新元素の、研究の勉強をすることになった。

それは大学と呼ばれる場所で七歳の子供が来るところとは思えなかったが、あの優しいお兄さんの子供になったからにはと思いい、必死に勉強して独自に研究して、喧嘩に負けないように成長薬、知性の水を作り、試しにモルモットに与えてみて効果が確認されてから、そのモルモットを安楽死させて、自分に使った。

効果は一週間で実感できた、抜き打ちテストで何度も知識から答えを導き、主席を取った。

今までまともに字もかけなかった子供が、と大学生達は大人気ない態度をとって、正直こんな連中が残れないことは分かっていた、未だ篩いにかけている最中。

自宅と大学を行き来する生活が一年続くと顔ぶれも減っていき、新たに入ってくる者も増え始めた、そこで自分達が篩いにかけていることによく気づき、必死に勉強し始めた。

勉強が目的ではなく、その倫理が試されていることに気づいていない事が根本的な勘違いだと気づかない辺りが発想の貧しさだろう。二年目で三年生になり、最年少で最古参になり、新入生も増え始めたが、半年で大半が変わり、また半年で十分の一に割っていく、それが一年生の難問、二年生は何所まで理解しているが、最終的に理解度と知識量、何よりも倫理的に優れた者が残る。

そんな訳で残ったのは三年生で二人だけ、10歳の僕と12歳の彼、唯一の同期の為かお互いに、よく新元素の研究室からデータを

盗む等して、新元素の基礎的な研究を続けていた。これがバレたら終わりでも研究するためには四年生まで待たなくてはならない。

それがハッキングのような遊びに繋がり、何所までハッキングで切るか競い合ったこともあり、暇なときはフォーチェーのゲームをして楽しんだ。

四年生に上がり、三年生が全滅したこともわかって、どの研究室も引く手あまなく。

基礎研に入り、二人で新元素の基礎を半年で完成させた、その結果ありとあらゆる学会から非難されたが、生物的機械因子が本当の元素で、それを魔咒元素と名づけた。

理由は基礎からでも判明した、フォーチェーのゲームに出るテクノマジと同じ現象を励起させることから、名づけたために、公式的な建前としては良かったが、他にも取り組んでいた基礎研究者から、名前の改善を申し込まれることが日増しに強まった。

どのみち、基礎を完成させたものの早い者勝ちで、おまけに新元素のために名付け親も速の勝ちちだ。

魔咒は生物に自然界に分散し年々増加、それを呼吸のように取り込むことから咒力とも呼ばれる魔咒を扱う根本的な力が誰にでも吸収された。

マグピットを完成させ、軽い現象を励起させると、大学から保育園から大学院まで本格的に基礎から教え始めた、大学院生は極少数のために僕らが上つてくることを待っている状態。

根本的にテクノマジと同じ原理を使えるのでその研究は深まり発展した。

その頃には魔咒が一般的な元素の名前になり、元素記号は研究途中のために付けられず、魔咒という漢字が記号名になった。

天空大陸は八つありニルヴァーナ、エンブリオン、アサルトメン

ツ、ブルーティッシュ、ソリッド、メリーベル、ハウズ、ムラダーナの八つの大陸、どれも四年前に現れ空中移動コロニーが十六、海上移動都市が三十六、そして人型可変式戦闘機スレイプニル、ローム字の頭文字からSRとも呼ばれる、新種の兵器が生まれ、この四年間でもはや陸海空の主力兵器になった。

それからニルヴァーナは拡張工事を続け、人口一千万の大学園都市を生み出した。

十一で大学を卒業し大学院で基礎及び補助機関のマグピットの研究を始め、二年で卒業し発表した今まで自力で発動しようとしていた研究者を驚かせるマグピット無しでの発動は非常に困難という題名の論文を発表して彼と一緒に批判を浴びた、根拠が無いという基礎研究者、マグピットのライセンスを借り受け研究する会社の桜花社、魔装SRを研究する絢爛社、SRを開発する舞踏社等と協力して開発に当たった。

自宅には毎朝、彼が来る一緒に大蛇流仙術を学ぶためだ、僕は幼い頃からやっているために筋肉の付け方が違う、呼吸も一分間に数回だ。

彼は12の頃からはじめ今年で五年目、基礎を終え本格的な鍛錬に入るところだ。

翌年、僕が満16歳になる頃に義父が目覚めた、感謝のつもりで今まで義父によって救われた人々から手紙を預かった。

それは膨大な量になり彼にも手伝ってもらい研究が遅れたがそれでも十二分に必要だった。

満17歳になる頃、ニルヴァーナの人口が多すぎるとして残る七つの大陸に学生を分散させることが決まった。

それから夏休みまで必死に集め、全部揃ったところでエンブリオンのゲーム部に連絡し、事情を話してから一日だけ部室を借りた。

僕自身も文章をしたため手紙に添えた。

フォーチェーン？で夏休みに口グインするらしく、未来を確率で

予想する能力はあてにならないことが分かった。

ゲーム部と調整してその日にぬいぐるみを着て待っていた。

ゲーム部交流の建前でプラカードを持って待っていた。

ゲーム部一行がやってきて色々いわれたが、その場所まで来て。

「実を言うとゲーム部は幽霊が多くて今回はこのような形になりました、今まで感謝します」

「そうか、君はあの時の」

「そうなります、実際もう成人を済ませているので実質的な親子の関係ですが、これからお元気で、ではこの辺で」

そして僕はログアウトした、あの時のお兄さんが成長した姿だった。

「やれやれ相棒の父親がコールドスリープに入っているとはな」

「そういうなよ、画期的な医療だろ」

「時代を飛ばしすぎだ、まっ、お前みたいな仙人もいるしな」

「間違っちゃ困るよ、あれは対仙術用が基本だよ」

「他に知らないんでよく分かりません」

「当座はフォーチェーンを出来ないな」

「その分鍛錬につき込めるって」

「君が魔咒研究者と知ったら誰でも驚くね」

「お前もな」

彼の身長は190センチ、重戦車の息子のようなもので、体重も100キロを超える。

僕のほうは180センチに届かない179センチ、体重は約75キロ。

いつも見上げて会話するので首が疲れる。

「境界の噂は聞いたか」
「聞いたね」

境界とは異なる惑星と繋がる回廊のことだ、一本道で一旦入れれば一方通行、入ったら行くしかなく、また入ったら帰るしかない。

八つの大陸に今まで不安定で調査も出来なかったが、安定化の技術が発表され、確立できたので調査団を送ったそうだが、しかし音信不通、何度も調査団を送っても音信不通、今では手に入らないお宝のようなものだ。

研究の成果で元素記号はM Zと決まり、これまた僕らが最初だったので非難轟々だった。

呪具の開発をはじめ、関わる企業は厳選して信頼関係のある今までどおりの三社。

それを半年で完成させ、競争する企業が争ってライセンスを借り受け魔咒士のマグピット、呪具の市場は急速に拡大し現在の一万から一銭までである国際紙幣円の相場から一兆円を超えた。

彼は生体強化系、変化形を得意として、僕は化学系と電磁系と相性が良かった。

未来を予想したような賢者の手帳も最後のページを終えたのが僕が18の頃。それ以降は義父と仲間たちが発展させるらしい。

遺伝子の知識から、彼を説得して遺伝子を強化するために一週間ほど二人でコールドスリープに入った。

一週間後病室で目覚めた時は、リハビリが必要なほど強化されており計算どおりだった。

彼と一緒に卵を掴むことから始めて力加減を掴むのに二ヶ月を要した。

それからは順調にリハビリをこなし大蛇流仙術の鍛錬を始めると面白いように腕前が上がっていった。

高名な剣術家を招き、手ほどきを受け半年で免許皆伝、お互い線が意識すれば見えるほどの、レベルに達し達人レベルに行き着いた。

それから研究を一時的に凍結して、三社に任せた。

それは世界を回り腕前を鍛えるためだった。

一年、世界で強いと呼ばれるものに対戦し、何度も負けたり、勝つたりを繰り返した。

その間に生体機械因子を体内で製造する遺伝子を生み出し、二人で使ってみた。

激しい激痛で何とか沈痛剤を作り二人で飲んだ、痛みが激痛から沈痛になり世界中を旅しながら戦闘技術を磨いていった。

野宿することもある、たまに戦場に迷い込むこともシバンバ。

僕が十九になる頃、全滅していた調査団の計画が一步進み、調査が成功したと報じられた。

二人で小学校まで若返り、学校は通信教育でひたすら魔咒術の研究、仙術の鍛錬、剣術の鍛錬を繰り返し中卒まで通信教育だった。

その間に調査も地道に進み、不確定な未来は相変わらずだった。

高校には行かずニルヴァーナ学園の大学院を受験して見事合格、

十五歳で大学院に入ったその後二年間知らなかった知識を貪欲に吸収し、それぞれの得意分野を研究して、卒業時に倫理に関する論文を二人で発表して博士号を手に入れた。

今まで避けてきた高校に入学して十八で質問攻めにあつた。

「学生は騒がしいな」

「だから避けてきたんだけどね」

「何所のどいつだ、最低学歴高卒って」

「休暇と思つて楽しもうじゃないか」

「やれやれ相棒の特技何事も楽しもう」

「それは口癖」

「そういえば二つの有限会社が分離して独占市場からなくなった

ね

「オーナーはどうしているやら」

「境界を越えたんじゃない」

「何でまた」

「非常に簡単スリルを求めて」

「金持ちにはありそうだな」

そんな訳で一年間初めての高校生活を送ります

第一編 0 1 (後書き)

次は主人公が出ます

1 1 満19歳の境界が一步(前書き)

本編スタート

1 1 満19歳の境界が一步

世の中分らないことがある、天才として名をさせた九弦家の次期当主は行方不明、その父親も行方不明、いつそのこと呪われているということを感じることはないにしろ、不可思議な話だ。

高3になり受験シーズンだ、進学の為に勉強するしかない頃に遣伝子の病気が判明し余命半年といわれた、両親は泣いたが、コードスリープがあると伝えられ眠りに付いた。

半年間で治療は終わり、無事治療できた、それからが問題だったのが困った話だ。

リハビリが必要なほど感覚が分からなくなり、同じようにリハビリしていた二人と仲良くなって共にリハビリをこなした。

名前は月影、空の少年二人だった。

兄弟のように中がよく、年齢を聞けば同じく高3らしいだが、飛び級で大学院を卒業し暇だからニルヴァーナの学園に通っているらしい。

二人からリハビリに武術を学んで、魔咒術を習った。

その二人の誘いでニルヴァーナの学園の最も過酷な戦闘訓練を受ける、戦闘科に入り同じように訓練を受けながら放課後には鍛錬と学ぶ事を毎日行なった。

おかげで平均的な身長180センチに達して体重は90キロまで上がった。

その二人は少しだけ高い182センチに100キロの重さ。

月影は日系で黒髪、黒目、黄色の肌、空は褐色系で銀髪、オッド

アイの赤と黒。

共に長年鍛えたようので筋骨粒々で剣術にも秀でる。

戦闘科で1、2を争う戦闘能力を持つ強すぎる親友だ。

二人から学び、鍛えられながらオレの戦闘能力も毎日の積み重ねなのか100位に入る。

中間テストで二人は教官達を纏めて倒し、その連係プレイは絶対の信頼感を感じさせるほど慣れ親しんでいた自然だった。正直この二人のレベルに達する高校生がいるかと疑問に思う。

期末テストになる頃オレの成績は上がり、50位になった。

夏休みひたすら鍛錬と学ぶ日々、睡眠時間は毎日22時から4時まで、それまでは食事の休憩以外は無い。

最初は疲労困憊で倒れそうになったが日々になれていった、適応力は恐ろしい。

夏休みが終わってから初日、学校に行く前に二人が住む自宅に招かれ、若い二十歳前後の執事の人に案内されみっちり鍛えられた。

後期の中間テストで9位に入り、周りから凄まじいポテンシャルと噂され、卒業テストが見ものと言われた。

剣術も学び二人は刀を使うが、オレは青龍偃月刀、中国の大刀の一種、長い柄に肉厚のある反った刃のようなものがあるやつだ。

刃が800ミリ、柄が800ミリの1600ミリ、二人が速さを重んじるが、筋力的に扱いやすい上に一撃の重さ、そして長さだ。

二人から学んでいくにつれ速さを重んじるのは攻撃回数を上昇さ

せ、小回りを利かせるためらしく、毎月柄が100ミリ縮んでいて卒業テストの時には400ミリの1200ミリに収まっていた。

卒業式は教官達と一騎打ちで一月が要された。

第三位に入り、主席の二人には届かなかったが、最下層から最上位まで上り詰めたのは何も言わず親友で師匠である二人のお陰だ。

二人が境界線を渡る予定になり、俺は二人についていくことにした。

もちろん両親は大反対、しかしもう成人で自立のためだと主張した。

結果的だが、二人が説得して許可してもらった。

「そういえば話してなかったけど苗字は九弦、空の苗字は翼、共に魔咒の基礎を完成させた父親を持つわけだよ」

「おいおい九弦って九弦有株式会社か」

「そう三代目になるね、祖父はもう歳だから現役を引退して運営に回るそうだ、両親は世界放浪、空の場合も空の祖父母は反対したけど、事務所の運営に回ってもらった」

「なる、半年間はファイトシミュレーションか」

「訓練にはもってこいだよ」

それから半年間、成人男性三人で、六時間のファイトシミュレーションで汗を流し、ニルヴァーナの境界線を越えるための模擬戦を繰り返していた。

境界線を越えた日、背後には一方通行の波打つ海面のような境界がある、それを境界線と呼ぶのだから納得だ。

一面に広がるのは基地のような施設ではなく学園のような施設だ。

二人が慣れた様子で案内して傭兵として登録された。

それからは毎日傭兵としての訓練の日々、それで半年が過ぎた。

二十歳になり、訓練生から駆け出しに昇格した。

二人の場合慣れていないもの、優れた学習能力で、一月で訓練生を卒業し、すでにレベル1の範囲の調査を行なっている。

久しぶりに再会すると二人は退屈そうに昼飯を食べていた。

「やっとレベル1だ」

「遅いぞ、あんな訓練に半年もかけるな」

「いや兵士としての訓練は難しく、すまないな」

「いいつて空が不機嫌な理由は本能的なものだ」

「性欲か？」

「おめでとう大当たり」

「レベル1で稼いだら一旦戻るか」

「そうしよう」

昼食を食べ終わると、パネルM4、グロツグ17ロングガラムマガジンの二丁、法則に則った物質を質量分解し必要最低限の弾薬で終えている。これでも苦勞して内職の講義を行なって稼いだ品々だ。

「なかなかの目利きだな、しかし火力が足りないカスタム屋に寄ろう」

「奢ってくれるのか」

「神が直々に命じても貸しにしておく」

「借りか、まあなんとかなるかな」

施設内の兵器商が立ち並ぶ一角にある、財布の中身を壊滅させることで有名な嫌な予感のする銃器店に入り、空が払うらしいが、月影が選び、超高価なオラクル系はエネルギーを加速力に弾頭を飛ばす弾薬が安い、その品々は馬鹿げたように高いハンドガン50口径を二丁、オラクルマテリアルポリング式ショットガンは100口径マテリアル専用弾に8ゲージの弾頭を込めた六発同時発射の六連装の銃身を持つどれも桜花社製品。

今までの品々を下取りに出し残り分を空が支払った。

「泣きたくなるぜ」
「安心しろ、弾薬も買っておいたよ」
「安心できないって」
「カスタム屋に行くぞ」

次に向かったのは破産覚悟で行けと言われる善意が全滅した看板の、破壊好きのならず者なら寄って来いという看板のカスタム屋。

「ようお二人、いつもどおり良い物に作りかえるぜ」
「じゃこの三つを」
「桜花社製か、高いぜ」
「気にしない」
「もう十分だ」
「全部」
「おう」
「重いね」
「気にするな、これは月影の奢りだ」
「さすが人格者」
「オラクル系は高値だ、覚えて置け」
「へい」

五時間ほど待ち、二丁の桜花社製正宗15が帰ってきた、競技用並に軽量化、試し撃ちの反動も扱いやすいレベル、火力もマテリアルライフル並みの25mm並み。

次の2時間でショットガンが戻ってきて、六連装ながらフルオートドラム式の弾倉が予備二個装着でき重量4キロ台。反動値も薄く破壊力は軍事兵器のSR並だ。

「装弾数も上げて置いたこいつはおまけだ」

「月影感謝するぜ」

「いいよ、どうせ金は余っているし」

「金持ちって楽でいいね」

「祖父から受け継ぐからね」

「俺も稼がないとな」

「じゃレベル1に行ってみますか」

「ああ」

弾薬を近くの店で買い込み、質量分解で背中に背負うバックに詰め込んだ。

エネミーが嫌う煙草を買い込み、防水燐寸も買い込み、次は歯のホワイトニングと娼婦代で消し飛ぶだろう。

レベル1の範囲のへりで運ばれ、降りた地点に補給基地があり、捕獲された原種が学術的な調査を受けていた。

大学院を卒業し高校では主席地同士だった超大企業と超有名研究者の息子とトリオを組み、狩に向かった、調査というがゲームのようにエネミーとの戦いだ。

この日の為に確認されたエネミーを随時分析したものをダウンロードする情報分析器、外見は丸刈サングラスで確認した、恐竜を現代風に例えると竜だ。

ブラックドラゴンが眼前の全身漆黒の巨竜は、その鱗の色が如実に示すとおり黒竜であった。猛毒を吐く獰悪な種類の竜である。しかも掲げた頭部までの高さは、優に家屋の二倍以上の高さがあった。頭頂までの高さの後方にくる尾までの竜の全長は20メートル、黒き邪竜の凜列した、その永劫の氷河の様な目が、彼らの視線と正面で衝突する。視線だけで身体を恐慌させる力を感じる程だ。

情報分析器に判明したのは生後一年ずつ一メートル成長し、二十年生きたブラックドラゴンらしい、蛇の毒に似た生成された毒には人体の細胞を分解する化膿連鎖球菌など、血管を破壊する総称を持つタンパク質分解酵素が含まれ、血管の破壊による酸素欠乏症でしに至らしめる猛毒を吐く、そんなドラゴンが暮らすのがモンハンのようなドラゴン楽園なのだ、皮肉にも境界線が楽園を楽園が破壊する、人類が繰り返している間違いと同じに見える。

しかし、こちらも餌になる気は無い、ドラゴンが襲わないならいい、襲うなら戦うしか道はないのだ。

二人は素早く両脇の死角に回り込む、プレスで一毛大尽に追い込もうとしたドラゴンはプレスを諦め、弱そうなオレを無視して二人に攻撃を仕掛けたのが間違いだ。

六十発のマテリアルショット弾をフルオートで六十発の8ゲージを食らわせた、ドラム式の予備弾倉に切り替え、リロードを終えるとさらに六十発を食らわせ、最後の弾倉で合計180発を食らわせた、そのブラックドラゴンの腹は貫通したマテリアルショット弾が、息絶えたブラックドラゴンの屍を見せ付けた。

「貸しの分はチャラだ、やるな一番薄いところに連続して、手早くリロードしてから自由激を続けるとは」

「死んだのか」

「ああ、モンハンの様だろ、楽園が楽園を潰すところが皮肉だが」

思いつきりこみ上げ来た中身を吐いた、人を殺したわけではない初めて生き物を殺した、それも強いか弱いかを見分ける知性を持った、そんな生物の楽園を血で汚した、よく考えるべきだった、他の惑星には他の惑星の楽園があることを。

あまりにも身勝手であまりにも傲慢なのが人類だと気づいたのが、蒼い証拠だといえる。

「誰かがやらなければならない、批判するのも、賛同するのもその実に染み込ませないと」

「分かった」

マガジンを落とし、質量分解していたドラムマガジンを三個物質化させ装弾し、装着した。

「次に行こうか」

「ふん、いっちょ前に勇者様面だな、あまり気張るな、ここでの生存数は一桁だ、特に単独ほど死に易い、軍隊なんかベトナム戦争より低い数字だ」

「酷い話だ」

「だからどこかの慈善家は良心の許す限り贅沢な装備をさせるのさ」

「月影」

「別にそんなわけじゃないよ、祖父が生み出した罪を贖罪しているだけだ、平和な場所で麦だけを食う連中よりましさ」

「行こうぜ、俺達の生き様を見せてやる」

「ああ」

その日で生還率は0・1パーセント3000人が出て戻ってきたのはオレ達だけ。

「報酬です」

「ここじゃ一番安いのが人間のようだ」

「すみません」

「いや貴方が謝ることじゃない、次からはサバイバルを学んだものが戻るだけだ」

「ありがとう、初めてです罵声を浴びなかったのは」

「いや誰もが不満に思っていることだろうよ」

「よく耐えましたね、明日もまた会いましょう」

「じゃあな姉ちゃん」

酒場に入るとごっそり人が減っていた、誰もが通夜のような顔だ。

「一日の稼ぎがたった百万とな割に合わないぜ」

「新入りだ」

その入った酒場の全員が起立して思い思いの武器を翳した、それが挨拶のようでショットガンを翳した。

「よく生き延びたな新入り」

「今日はマシな方だ」

「よし月影のおごりだ、飲むぞ」

「好きなだけ飲んでね」

今までの暗い雰囲気から一変して陽気な酒飲みの集まりに変わった。

酒場で紅一点のウェイトレスが忙しく酒のボトルを配っていた。

「新入りは悪いが缶ビールだ」

「何だよそれ」

「冗談だよ、何事も真に受けちゃ身が持たないよ」

「良かった、ジンジャーエール」

「カクテルは二度目を終えた者の特権なんだ」

「それは冗談じゃなさそうだな、ウオツカ」

「ウオツカを三本」

それから修羅場を潜ってきた者同士好き嫌いは有るもの、それぞれ最初の話の話を聞かせた。

ここではサバイバルを学んだものだけが生き残る、生存本能と危機察知能力が長けていることだけが、一番の特技。

泥酔するまで飲み、酒場の個室に放り込まれたらしく寝台の傍で寝ていた。

個室で起きた後、同じ様な者同士朝飯を食べて、生き残るために情報交換をしていた。

それから半年間、ひたすらレベル1の調査範囲で学習していた。

何を学習したか、簡単なことだここで生き残るために、どんな生物がどんな行動を取るかの学習だ。

その間に堪った学術的な論文を一人で書き上げ、学者の方々に審査してもらい、新入りに教える事になって、論文として発表することを強く勧められた。

この学園のような場所で、生存率を上げるため苦心したために、この場所で教える事になったのだ。

1 1満19歳の境界が一步(後書き)

どんな印象でしょう、作者に至らない点があると思いますので感想などをお待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9408y/>

賢者と天才と凡人

2011年11月28日01時54分発行